

インタビュー



みなもと じゅんこ
源 淳子さん
世界人権問題研究センター登録研究員

日本における宗教による 女性差別の構造



約2500年前にインドで誕生した仏教。その後、中国・朝鮮半島を経由し、6世紀中頃（古墳時代）に日本に伝来しました。それから1400年以上経った現在、私たちの生活に様々な影響をもたらしている仏教をどう捉えるのか。長年にわたりフェミニズムの観点から日本の宗教について研究する源淳子さんにお話を伺いました。

（インタビュアー：藪本 雅子（やぶもと まさこ）：日本テレビアナウンサー、同報道局記者を経て現在フリーで活動）

藪本 お寺の娘として生まれて、女性の人権について考えるようになったのはなぜですか。

源 私は島根県の出雲の浄土真宗本願寺派の小さな寺に生まれました。母と父が結婚して最初に生まれた子どもでしたので、母がどれだけ落胆してしんどい思いをしたことでしょうか。望まれたのは寺の跡継ぎとなる男の子です。次は弟が産まれましたが、弟は生まれた時から人生が決められていて自由がない生き方が求められたのでかわいそうでした。家制度が戦後なくなってもかわからず、仏教や政治や家元などの世界は世襲が残っていました。寺の娘ということ、道徳的にはいい子でいなければいけない。小学校の通信簿に「右を向けばいい」までも右を向いている」と書かれるほど融通が利かず、「世間」の常識で生きてきたのです。教員になるつもりで大学に入り、それまできちんと勉強してこなかった仏教や親鸞¹について初めて向き合いたいのと思いました。それで、大学院でもう少し親鸞の勉強をしたいと思います。お金がないから行くと言われればすっきりしたと思います。私が女だから反対だったのです。

源 淳子さん

長年にわたり、日本における宗教と女性史について研究を重ねる。日本の性差別の構造を紐解き、現在のジェンダーギャップ指数の低さとの関連性をはじめ、2003年から女人禁制の「大峰山」の開放運動を続けている。

女が学歴をつけたら結婚できる相手がいなくなる、と。無性に腹が立ちました。その時は分からなかったけれど、それは女性差別です。そばで聞いていた母はただ黙っていて、そういう親の夫婦関係にも疑問を持つようになりました。

●四つの自立

源 親の反対を押し切り大学院で真宗学を学んだ後は、小学校の教員になりました。結婚もしましたが、相手はその時大学院生だったので、私が養いました。彼が大学の専任教員になったのを機に私は専業主婦になりました。それは自分で選んだことでしたが、数年経って、ああ、こんな人生がずっと続くのかと思ったたらたまらない気持ちになりました。

藪本 分かるような気がします。**源** 夫婦関係に悩みながらも勉強だけは続けていて、博士課程にいた頃、フェミニズムに出会いました。ジェンダーの問題を学ぶことによって、なぜ自分の人生が面白くないと感じるのか、性別役割分担の問題が分かってくる、私にとって一番よりどころとなる思想はフェミニズムだと思ったのです。**藪本** フェミニズムについては、一部の過激な女性の活動と誤解し

ている人も少なくないと感じます。改めてどういう考え方なのでしょう。

源 日本では女性解放運動と訳されます。男女平等を目指す運動です。性別役割分担や、歴史的に浄穢^{じようえ}、優劣をつけた男性中心社会が現在も残っている。そこからの解放です。フェミニズムは男女を問わず「四つの自立」を掲げていました。「経済的自立」「生活的自立」「精神的自立」「性的自立」をいい、「個」の確立を目指すことをいいます。精神的な自立とは、この社会の中に差別があることに気づき、なくそうと思って動くことです。性的自立は性的自己決定権を自分が持つということです。性被害は夫婦間にもあります。女性も声を上げられなかった。対等に男女が性の関係を持つという事です。専業主婦だった私は、当時生活的自立しか果たしていませんでした。フェミニズムに目覚めてから、当時の夫との関係がうまくいかないと気づき、離婚という選択をしました。

●経典の中の女性差別

藪本 その後もジェンダーの視点をもちながら、仏教の勉強を続けてこられたんですね。

源 はい。誰も教えてくれなかったことですが、経典の中に女性差別の文言があることを見つけました。大きく二つの言葉がありました。一つは「女人五障^{にょじんごしょう}」で、女性には五つの障りがあり、帝釈天^{たいしゃく}、梵天王^{ぼんてん}、魔王^{まおう}、転輪聖王^{てんりんじょうおう}になれない。最後五つ目は仏になれないと出てきます。経典を一人で読んでいて、この言葉を見つけた時はものすごくショックでした。

藪本 仏教では人が死ぬと成仏すると説いていると思っていましたが、それは衝撃です。

源 もう一つが「変成男子^{へんじょうなんし}」。女性は一度男に変わって成仏するという意味です。なんで女が男にならなきゃいけないのかとまたまたショックでした。

藪本 なぜ、そんなことにされてしまったのですか。

源 釈迦^{しやか}が亡くなって、500年ぐらい経ち、初期の仏教経典ができて、その後に大乘仏教の法華経や無量寿経^{むりやうじゆきやう}、般若経などの経典がつくられていきました。無量寿経は浄土真宗のよりどころとなる経典ですが、その中にも変成男子の考え方があります。

藪本 それは明らかに差別的な考え方だと感じます。仏教は人間の平等を説いているのではないの

* 1) 親鸞（1173～1262年）浄土真宗の宗祖

ですか。

源 平等を説いているのですが、一方で仏教は女性を差別してきたのです。博士課程が終わった頃、「仏教の女性観」というタイトルで、私は先程の二つの言葉を出して学会で発表したことがあります。すると、質疑応答で重鎮といわれる先生が挙手されて、「源さん、仏教を一から勉強してください。仏教はそんなことを説いていません」と言われました。でも、書いてあるのですから。その場では頭が真っ白になって何も言えなくなっていました。その後も調べていくと、それに類する差別文言が出てくるのです。

藪本 2019年に、源さんは真宗大谷派が開催した「經典の中の差別展示」の監修をされました。經典の女性差別についてのパネルも用意されたそうですが、直前に宗務総長から時期尚早として取り外されたそうですね。ハンセン病や被差別部落の差別については經典の中の差別を認めているのに、同じ文脈にある女性差別はなぜいまだに認めることを拒否するのでしょうか。

源 長年研究を続けてきて思うのですが、他の問題は遠い問題で、自分の足元は問わなくてもよいか

らじゃないでしょうか。それに、部落差別も本当に謝ったわけじゃないのです。部落差別は、「是施陀羅」という言葉で經典の中に出てきます。施陀羅は古代インドの被差別民を指し、それを仏教者は日本の被差別部落民に喩えて説明してきました。部落解放同盟から差別を助長すると指摘され続け、昨（2021）年、真宗大谷派は改善を誓う決議を出しましたが、經典をどうするかまでは至っていないのです。100年前から「検討する」のままです。

藪本 間違いだつたと気づいているのですよね。

源 それは仏教者が親鸞、經典を絶対化してきた証です。人間がつくったものが絶対であるはずがないと私は思っているから、親鸞の批判もします。国も時代背景も違うから親鸞の教えにも限界があると思うのです。だからといって、親鸞の評価が下がることはない。

藪本 宗教者は日本人の思想に大きな影響を与えてきたと思います。それが差別を生み出した背景にあるのなら真摯に向き合ってもいいように思います。

源 仏教界が変われば日本は変わると思うのです。仏教の信徒さんは日本で一番多いですからね。

● 穢れと女性

藪本 日本の穢れ意識も、あらゆる日本の差別に関わってきたるように思います。

源 穢れは死と月経と出産を指しました。月経と出産を合わせて、血の穢れです。怪我をして流す血とは違い、女にしか出ない血を穢れとしたのです。また、形が違ふものを異形として穢れ多いものとして排除してきました。ハンセン病も被差別部落も障がい者も、それから女性も神聖な場から排除の対象になりました。

藪本 科学が発達していない時代にあっては、血は人々の恐怖や不安を喚起しますから穢れとして遠ざけようというの分からも分らないですが、人間を穢れとする、しかも人類の半分は女性です。今の価値観からは受け入れ難いです。

源 神道では穢れには期限があります。月経は7日、出産は30日というふうな。それが過ぎたら大丈夫になるのです。ところが日本の仏教は、女性はいつも穢れているとしました。だから比叡山、高野山など女人結界に女性は立ち入ることを許されなかったのです。かつて奈良の興福寺や京都の醍醐寺もそうでした。現在は「大峰

山」（奈良県）がまだ女人禁制です。

藪本 穢れは神社の清め祓いの結びつきが強いと思われていますが、実は、仏教も大いに穢れを取り入れてきたのですね。

源 むしろ仏教の方が穢れを無期限にしたのですから、きついです。比叡山の最澄^{*2}は、穢れだけでなく五障三従の考え方も取り入れています。女は三従の身、父と夫と息子に従えという教えです。

藪本 そういうものだと思います。きたところもありますが、今思えば、女に従属を強いている。違和感しかない。

源 女をここまで排除した理由に、女を罪深いとしたことや穢れがとても大きいです。近世の檀家制度の中で、個人が信仰を選べない家の宗教となり、仏教者が一般の人に伝えてきました。その結果、歪められた女性観が刷り込まれたのです。日本人は宗教的なイベントには当たり前に参加します。七五三、厄払いなどは神道で、クリスマスは祝うし、人が死んだら仏教で。お宮参りの際、産んだお母さんは我が子を抱けず本殿に入れない場合があります。死者は穢れているので葬儀で「清め塩」をもらう。大安、仏滅などの六曜の迷信をありがたがる。そんなもの

を何の疑問も持たずに受け入れてきたのです。

藪本 伝統だと思っていて、あまり深い意味は考えてこなかったかもしれない。その思考停止な態度が、ここまで差別を長引かせている理由なのでしょうか。

源 日本人は宗教に拒否感がありながら、いつの間にか刷り込まれています。近代になって信教の自由が一応保障されて個々人が選ぶ時代となったはずなのに、家制度ができた上に、近世から続いた檀家制度が残ってしまいました。それは、現代もなお家制度がなくなくなったにもかかわらず、お墓、遺骨が日本人を縛っているのです。

藪本 遺骨は遺族にとって大事なものですよね。

源 私は長年一緒に暮らしたつれあいの遺骨を拾いませんでした。彼も、親鸞を勉強した人で、フェミニズムを理解できる人でした。親鸞は自分が死んだら遺体を加茂川に流して魚の餌にしてくれと言ったのです。遺体を焼くか焼かないかの違いで、遺体と遺骨は同じ意味と考えられます。親鸞の死の考え方がよく分かるエピソードです。私たちは、どちらが先に死んでもお互いに遺骨は拾わないと決めました。彼はずっと私の中で生

きているけれど、遺骨としては生きていないです。遺骨は家制度的なものや教団を支えています。遺骨に縛られるのは、国家や仏教者が遺骨の大事さを説いてきたからです。もう一度遺骨とは何ぞやという問題に立ち戻って考えてもよいのではないのでしょうか。遺骨の何を大事にできたのかを問う必要があると思います。

藪本 遺骨を拾わない決断はなかなかできるものではありませんが、宗教の教えや儀式の意味について、ちゃんと理解した方がいいですね。誰かを傷つけるような宗教なら私はいらない。

源 最初に申し上げたフェミニズムが目指した「四つの自立」に、私の造語ですが、「宗教的自立」を加えたいと思います。貧しさや病気、孤独な状況の人に宗教はすつと近づいてきます。カルト的な宗教に入信してしまうと、全財産を注ぎ込んだりしてしまいます。やはり宗教を見極める力が大切だと思います。それが「個」を確立させていくと考えます。



* 2) 最澄（767～822年）天台宗の開祖

❖後記 宗教は幸せに生きるためにあると信じています。今の人権感覚に合わない考え方があれば訂正していいと思う。人々から尊敬される宗教であってほしいと心から思っています。